

【vol.15】単音カッティングと、ペンタのミュートフレーズ

こんにちは、大沼です。

さて、今回の Vol.15 では、単音のカッティングフレーズと、ペンタニックスケールをベースにした、ミュート奏法を学んで行きたいと思います。

参考にする曲は、『MVP(マーク・ヴァーニー・プロジェクト)』の【Love Struck】と、『Earth, Wind & Fire』の【Sing a Song】の2曲です。

前者は、元々は超絶ギタリストを集めたアルバムですが、今回はテクニカルプレイとは関係の無い、バックングについてです。笑

後者は、有名バンドの曲なので、もしかしたら知っているかもしれませんね。

今回のカッティングフレーズの特徴として、以前、“The Police”の曲でやったような、「右手はある程度ちゃんと振ってるんだけど、狙った弦周辺にストロークを当てる」というテクニックを使います。

右手のストロークが大事なのももちろんですが、左手の不要弦のミュートもかなり重要なポイントになってきます。

左手のミュートで余計な音を出さずに、かつ、右手をしっかり振ってストロークし、キレのいいニュアンスを出すテクニック。

ぶっちゃけ、このコントロールが出来ると、カッティングは大体どんなフレーズでも弾けます。(もちろんフレーズごとに練習は必要ですが)

例えば、バレーコードでカッティングする時のような、沢山弦を押さえて、ほぼ全弦(弦5、6本)ストロークするようなカッティングは、弦を押さえるのも、ミュートも、そこまで難しくはありませんよね？(カッティングと言うよりは、もう事実上ストロークですが)

今回の曲でやるのは、それとは違った、狙った場所をヒットする、ある種、繊細なコントロールのフレーズです。

細かい部分にも気をつけつつ、思い切りよく弾きこなせるようになりましょう。

もう1つのペントニックのフレーズは、どちらかという、
ちょっと大人っぽいジャンルの音楽などで、よく使われる奏法です。

普通のロック、ハードロックなどのバンドの曲ではあまり出てきません。

ギター、ベース、ドラムがいて、さらに鍵盤の音だったり、
シンセサイザーの音だったり、たくさんの楽器がいる中で、
ギタリストが周りの邪魔をしないように、よく使う奏法です。

スタジオミュージシャン系の人がいるバンドだったり、
そのままスタジオミュージシャンが弾いていたりする曲で、
たまに出てきます。

もしかしたら、あまりなじみがないかも知れませんが、AOR(アダルト・オリエンテッド・ロック)と
呼ばれる、洗練された、大人っぽいロック音楽のジャンルでも良く出てきますね。
(今回はファンクの楽曲をモデルにしますが)

ずーっとロックやハードロックだけだったり、最近のバンドの曲だけを弾いていたりすると、
下手をしたら、一生やることのないかもしれない奏法なので、
これを機に、触れてみて欲しいと思います。

では、まずは単音カッティングからやっていきましょう。

こちらは『MVP(マーク・ヴァーニー・プロジェクト)』の【Love Struck】をモデルにやっていきます。

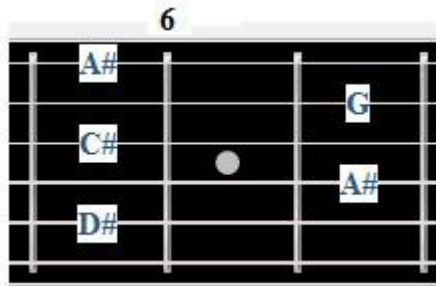
※Youtube モデル楽曲リンク
https://youtu.be/k_SmNVXkzwA

譜例 1、サンプルフレーズ、『MVP』【Love Struck】風 1:26～

The image shows a guitar solo score for the song 'Love Struck' by MVP. It is written in 4/4 time with a key signature of two flats (B-flat and E-flat). The score is divided into two systems. The first system starts with a rest for 7 measures, followed by a melodic phrase in measures 8 and 9. The second system contains measures 10 through 12, featuring a complex rhythmic pattern with many sixteenth notes. The tablature below the staff indicates fret numbers (6, 8, 11) and includes an 11-fret bend in measure 9. The notation includes various guitar-specific symbols like 'x' for muted notes and 'mf' for mezzo-forte dynamics.

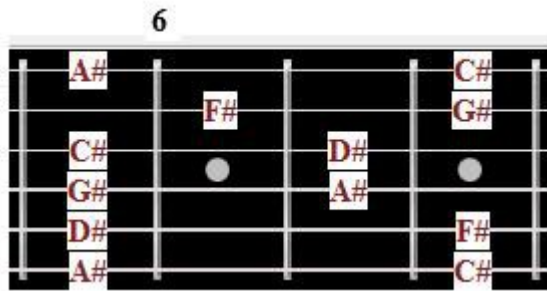
と言う事で、まずはいつものコード進行の確認から。

コード進行はE \flat 7ですね。フレーズの拠り所となるE \flat 7のコードはここです。



(※譜面作成ソフトの都合で音名が#表示になっていますが、今回の場合、正しくは \flat 系で読みます。)

コードがドミナント7thなので、仮に使うスケールを想定するならば、ブルーススケール的な観点から、E \flat のマイナーペンタ辺りが弾きやすいですね。(もしくはE \flat ミクソリディアン)



(※こちらの図も音名の#、 \flat については同上)

この様に、コード進行と、そこで使われている(と想定できる)スケールを照らし合わせてみることは、フレーズを分析するのに重要なポイントになってきます。

さて、このフレーズですが、以前、The Policeの曲でやったように、鳴らしたい弦と、その周辺だけをピンポイントで狙ったカッティングでしたね。

なので、さっきの譜面に、実際にピックがあたる場所を無理やり書き込むと、大体こんな感じになります。

かなり譜面が見つらなくなりましたが笑、このようなイメージで、ピックを当てる部分をストロークでコントロールします。

括弧が付いてる×印は、「まあ、当たっちゃったらしょうがないかな」くらいの感覚でいいので、右手をある保程度しっかりと振ることを意識しましょう。

で、もう1つ重要なのは左手のミュートなんですが、とにかく、その時使える指全てを総動員して、なんとしてでも鳴らしたい音以外をミュートします。

奏法のポイントは、大きく2つあって、

- ・右手は鳴らしたい音の周辺部分を鋭くストロークする
- ・左手は、余計な音を鳴らさないように、出来る限りミュートする(不要弦に触っておく)

と、この両手のテクニックがしっかりとできるかどうかで、フレーズのカッコよさが変わります。

細かいニュアンスは音源を良く聴いて感じを掴みましょう。

ちなみにサウンド的にはリアとセンターのハーフトーンのような感じです。

なんだかんだ言って、突き詰めると結構高度なプレイなので、上手く弾けない場合は、超ゆっくりのテンポから練習してくださいね。

この手のプレイを、サラッと弾きこなせる人は中々いません。

弾けるとかなりカッコいいので、マスターしておきましょう。

では、次に、ペンタをベースにした、単音ミュート系のプレイを弾いてみましょう。

参考にする楽曲は『Earth, Wind & Fire』の【Sing a Song】です。

※Youtube モデル楽曲リンク

<https://youtu.be/HBpsOu8jyU8>

譜例 2、サンプルフレーズ 『Earth, Wind & Fire』 【Sing a Song】風 0:05～

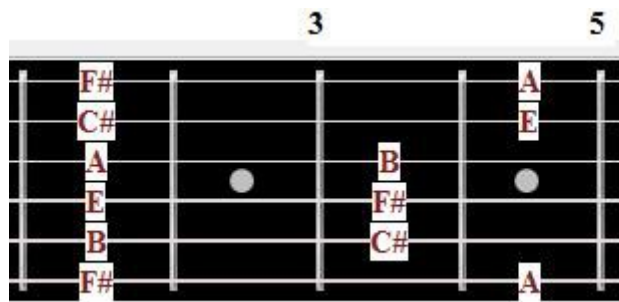
The image shows a guitar score for the song 'Sing a Song' by Earth, Wind & Fire. It consists of two systems of music. Each system has a treble clef staff with a key signature of one sharp (F#) and a 4/4 time signature. The first system covers measures 1-4, and the second system covers measures 5-8. The chords are A, A/C#, Bm, and E7sus4. The tablature is written below the staff, showing fret numbers and 'x' marks for muted strings. The first system starts with a dynamic marking of *mf*.

基本的に、一定以上伸ばす音以外は、軽くブリッジミュートを掛けながら弾きます。

×印で現しているような部分は、基本的には弾くも弾かないも自由なのですが、ある程度は入れた方がカッコいいので、その辺り、原曲を良く聴いて、感じを掴んでください。

コード進行は、A、A/C#、Bm、Esus4 の4つですね。

この辺りの分析については、詳しくは今後のテキストでやりますが、key=Aの進行なので、フレーズにはAメジャーペンタが使われています。



さて、このフレーズで重要なことは、ほぼ全ての音符を軽くブリッジミュートしながら弾くところと、16分音符のリズムで、オルタネイトピッキングのアップダウンを必ず守るところです。

ブリッジミュートは、必ず音程が聴こえるように、深すぎず、浅すぎず、ちょうど良いポイントでミュートします。

深すぎると、音程が不鮮明になりますし、浅すぎると、1音1音が長く鳴ってしまい、リズムがべたつとした感じになりますので。

オルタネイトピッキングの方は、16分のアップダウンを守らないと必ずリズムが乱れます。

こういったリズム的なプレイは、リズムが合っていないと終わりなので、注意しましょう。

あとはそれぞれの音価(音の長さ)だったり、ゴーストノート(×印)のニュアンスだったり、原曲をよく聴いて、感じをつかんでくださいね。

この曲は最初の方で書いたような、AOR(アダルトオリエンテッドロック)のジャンルではないですが、アレンジ的に、色んな音(楽器)が同時に鳴ってますよね？

こういう時に、ギターがコードをジャカジャカやったりして、沢山の音を鳴らしてしまうと、曲の邪魔になることが多いのです。

曲全体を聴いてもらえればわかると思いますが、譜面にした所以外も、ギターは単音のプレイがメインです。

出てきても、ちょっとコードが鳴っているくらいですね。

まあ、曲がファンク系の軽快なタイプの曲なので、そうしている、という事もあると思いますが。

一曲通して、非常にカッコいいギタープレイが満載なので、可能なら耳コピしてみてもいいかもしれません。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼